資料2
科学技術・学術審議会学術分科会
研究環境基盤部会国語に関する学術研究の推進に関する作業部会（第2回）
文化審議会国語分科会
国語研究等小委員会（第2回）
（合同会議）
23.10.13

人間文化研究機構
国立国語研究所の
組織・業務に関する
調査・検証について
〈報　告〉

平成23年7月

本資料は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所
組織・業務調査委員会の報告書を、簡潔にまとめたものである。

報告書p.1～2

Ⅰ.調査･検証にあたって

1）資料･情報の収集･整理･発信等

2）調査研究の推進

3）国際交流･連携活動

4）大学院教育等若手研究者の育成

5）社会への貢献等

6）組織･予算等

Ⅱ.新国語研の概要

◆ 研究活動の重点

国際連携

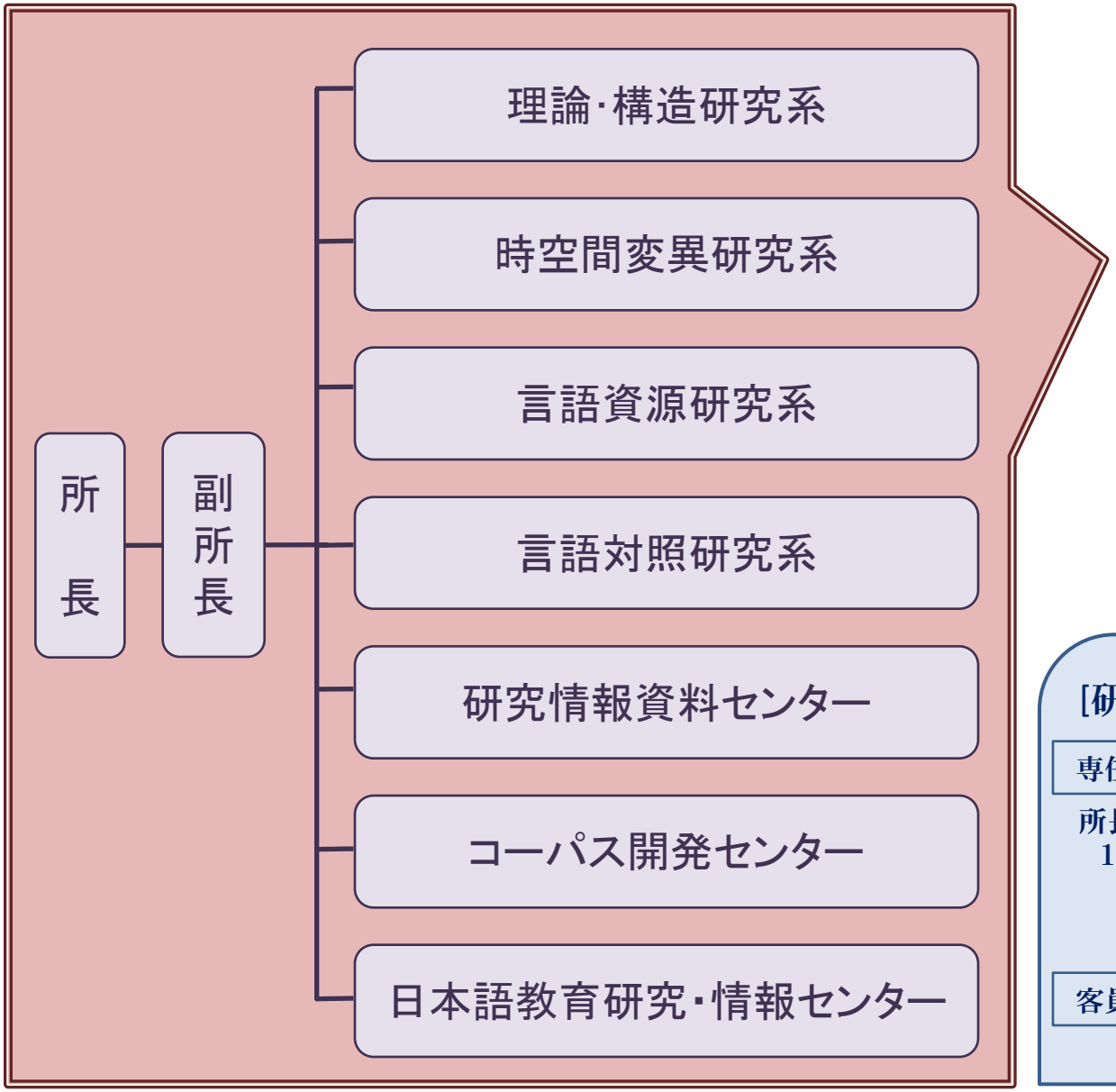
- 日本語研究の中核拠点として、国際的な体制で研究を推進

社会貢献

- コトバという「資源」の記録・保存・分析を通して豊かな社会作りに貢献

報告書p.54・p.55

◆新国語研の組織図



- 大学と同じ教授･准教授の職階
- 附帯決議に基づき、日本語教育研究・情報センターを設置
- ４研究系３センターに第一線の研究者を専任・併任または客員として配置

[研究体制(2011.10.1)]

専任

所長	教授	准教授	助教	研究員	計
1	１０	１５	1	2	２９

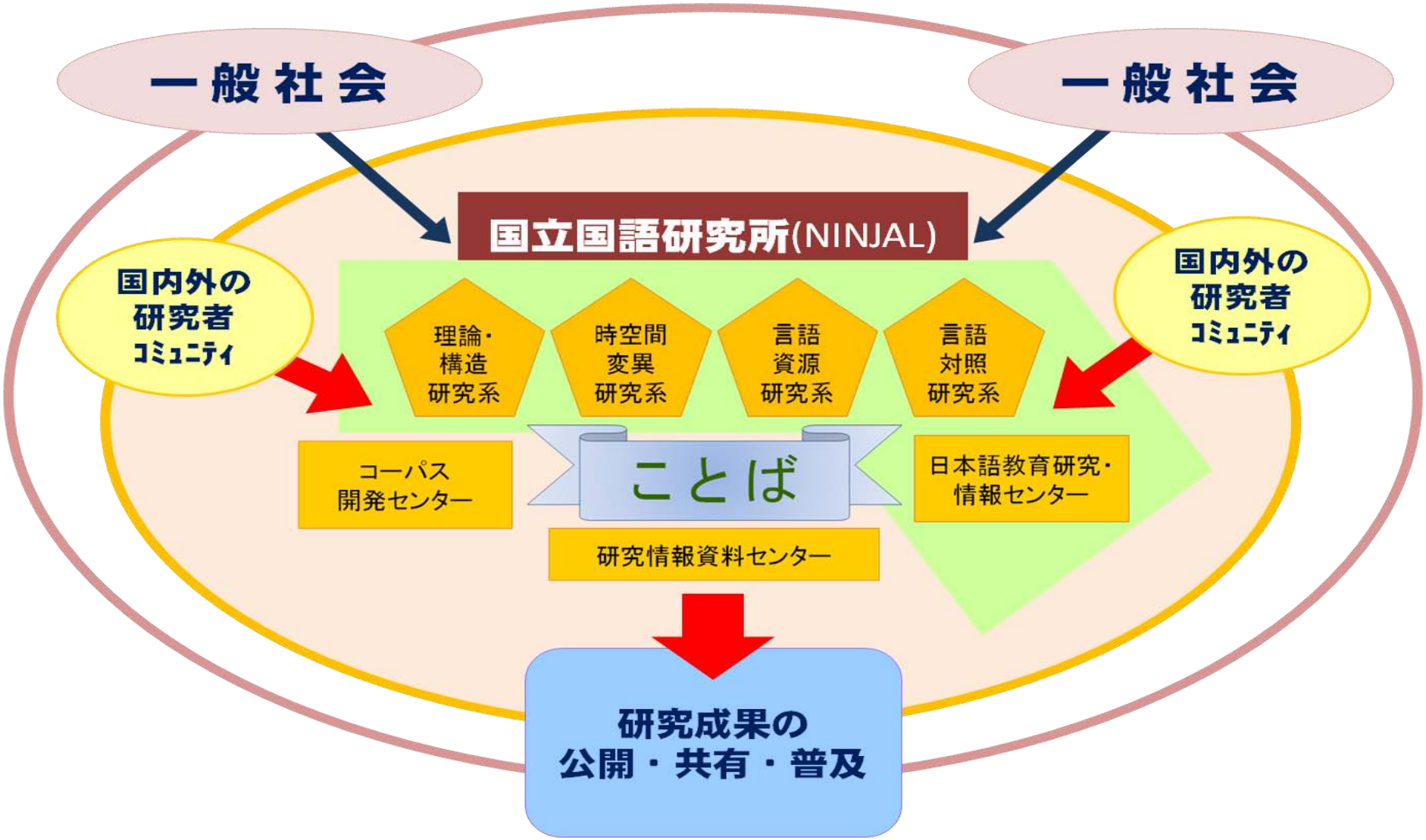
うち外国人３

＊博士学位取得者数　１４名(48.3%)

客員

日本人	外国人
１２	2

◆ 研究活動と社会貢献活動



Ⅲ.旧国語研との比較･検証について

(1)資料･情報の収集･整理･発信等

○資料･情報の収集

〈新国語研〉
世界諸言語との対比のため、海外の図書資料等も含め、旧国語圏より広範に収集

〈旧国語研〉
現代語を中心とした図書資料等の収集

〈検 証〉
海外の図書資料等の収集にも力を入れていることは適切

○情報発信

〈新国語研〉

・情報や成果の発信を、研究情報資料センターに一元化
・ウェブサイト(日・英)を全面改訂し充実
・「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の完成･公開
・「日本語研究･日本語教育文献DB」の完成･公開
・旧国語研のDBの承継･公開
・学会･学界との一層の連携

〈旧国語研〉

２部門・１センターで、それぞれの職掌にしたがって情報･成果を発信

〈検 証〉

研究文献のDB化、英文ウェブサイトの充実、承継データベース及びコーパスの一般公開は、適切且つ意義深い

○刊行物

〈新国語研〉

・即応性を重視し、学術情報誌「国語研プロジェクトレビュー」及び「国立国語研究所論集」をウェブサイトで発信

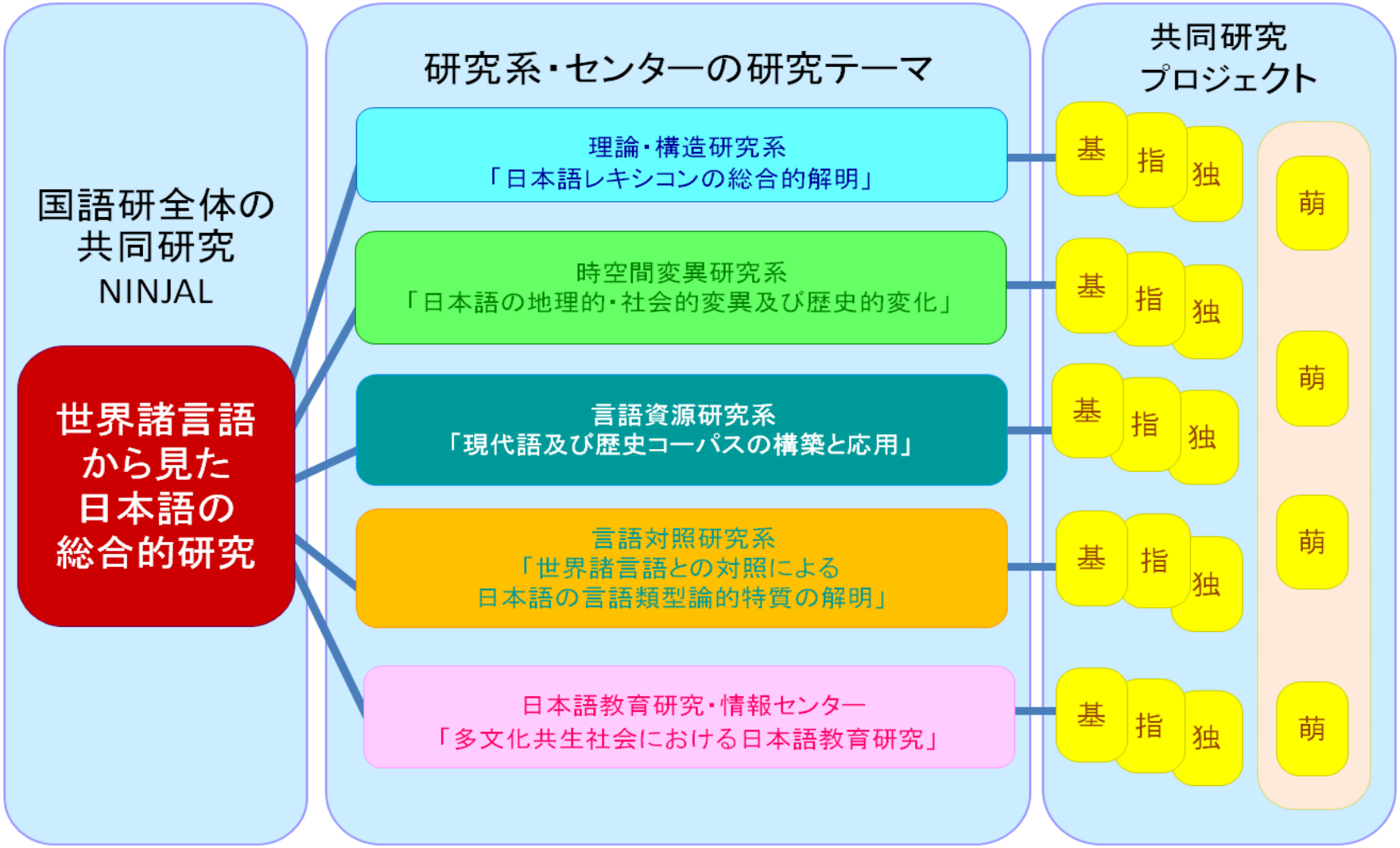
・紀要類等以外は個人研究者を著者名とした学術書及び論文として刊行

〈旧国語研〉
成果普及は図書の刊行が基本
また刊行物の著者名は全て旧国語研

〈検 証〉
研究者の自主的な研究の推進を図り、学術情報誌をウェブ発信していることは適切

(2)調査研究の推進

・共同研究のしくみ



・共同研究プロジェクト

〈新国語研〉

・国内外の大学等の研究者との連携により、共同研究プロジェクトとして推進

・４種類：基幹型(15)、領域指定型(8)、独創･発展型(7)、萌芽･発掘型(9)

・基幹型については､外部評価(ヒアリング)を実施

〈旧国語研〉
所内の研究者が中心となって「調査研究」を実施

〈検 証〉
延べ500名の外部研究者と共同研究を推進することは適切

・有機的連携
・人間文化研究機構の事業への協働

〈新国語研〉
・４研究系及び３センターの有機的連携
・機構が実施している連携研究等に参画･実施し、一研究所の枠を超えた共同研究･共同利用を推進

〈検 証〉
所内の有機的連携及び機構の連携事業等への積極的参画は適切

○研究内容

・国民の言語生活に関する調査研究

〈新国語研〉
- 「敬語と敬語意識の半世紀-愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に-」
- 共通語化に関する経年調査の継続
- 「方言の形成過程解明のための全国方言調査」

〈旧国語研〉
- 「敬語・敬語表現に関する経年調査」（愛知県岡崎市）
- 「共通語化に関する経年調査」（山形県鶴岡市）
- 「全国規模の「ことば」情報の収集・分析」を実施

〈検 証〉
旧国語研の調査等を発展的に引き継いでいることは適切

・コーパスの構築計画

〈新国語研〉

- 言語資源研究系とコーパス開発センターとが協力して「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ*)の構築を完了　*Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese
- 100億語規模の超大規模コーパスの構築に着手
- 「史的コーパス」の開発はオックスフォード大学と連携

〈旧国語研〉
「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の構築に着手
(科研費
特定領域研究)

〈検 証〉
超大規模コーパスの構築は、共同利用に供することとなり、適切

・日本語教育に関する調査研究

― 承継業務の充実・発展と新規業務の展開 ―

〈新国語研〉

- 日本語教育研究・情報センターでは、旧国語研の調査研究を承継し充実させるとともに、新たに社会言語学や心理言語学、コーパス言語学等の幅広い学問領域と連携
- 新旧の研究を包括した新たな大規模プロジェクトとして基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」を実施
- 公開フォーラム等で研究内容を紹介

〈旧国語研〉
日本語教育情報資料の作成・提供が目標

多文化共生社会における日本語教育研究

多文化共生社会において必要な**日本語学習者の言語運用能力**を、
多様な視点から実証的に解明するとともに、
そうした能力の習得を支援する方策について検討する。

基幹型共同研究プロジェクト
多文化共生社会における日本語教育研究

サブプロジェクト
学習者の言語環境と
日本語の習得過程に関する研究

サブプロジェクト
社会における
相互行為としての「評価」研究

サブプロジェクト
「生活のための日本語」の
内容に関する研究

サブプロジェクト
日本語の基本語彙に関する研究

独創・発展型
共同研究プロジェクト

定住外国人の
日本語習得と
言語語生活の
実態に関する
学際的研究

日本語学習者用
基本動詞用法
ハンドブックの作成

①日本語教育に関して承継して充実・発展させた業務

〈新国語研〉

- 「生活のための日本語」の内容に関する研究
- 社会における相互行為としての「評価」研究
- 日本語の基本語彙に関する研究

※これらは、「多文化共生社会における日本語教育研究」プロジェクトに含まれる

〈旧国語研〉

- 「学習項目一覧・段階的目標基準の開発」
- 「学習目的別の日本語能力評価基準の開発」
- 「日本語学習のための用例用法辞書の開発」

②－1 日本語教育に関して新規展開の業務

〈新国語研〉

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」に含まれる

●「学習者の言語環境と日本語の習得過程に関する研究」
- 「言語環境と日本語習得」班
- 「言語転移と日本語習得」班
- 「学習者コーパス研究」班

②－2 日本語教育に関して新規展開の業務

*「多文化共生社会における日本語教育研究」と関連するプロジェクト

〈新国語研〉

- 「日本語学習者用語基本動詞用法ハンドブックの作成」（独創・発展型）
- 「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究」（独創・発展型）
- 「日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発」（領域指定型）

〈検　証〉

日本語教育研究に関して、旧国語研の研究を承継するだけでなく、他の研究系やセンターと有機的な連携を保ちつつ共同研究活動を実施していることは適切

(3)国際交流・連携活動

〈新国語研〉

- 外国人研究者を専任、客員、共同研究者として招へい
- 諸外国の優れた研究機関との連携・協力（オックスフォード大学、マックスプランク進化人類学研究所）
- 国際シンポジウムの開催など、海外の研究者及び研究機関と積極的にネットワークを構築

〈旧国語研〉
研究者の派遣・受け入れが国際交流の中心

〈検 証〉
国内外の日本語研究者に開かれた協業の場を提供していることは適切

(4)大学院教育等若手研究者の育成

〈新国語研〉
- 一橋大学との連携大学院を継続
- 全国の大学院生を中心とする若手研究者向け講習会として、新たに「NINJALチュートリアル」を構築･企画･実施
- 公募によりＰＤフェローを採用

〈旧国語研〉
- 一橋大学との連携大学院
- 政策研究大学院大学及び国際交流基金日本語国際センターとの３機関連携大学院

〈検 証〉
研究成果を大学院教育全般に活かす活動として新たな仕組みを構築したことは妥当

(5)社会への貢献等

○研究成果の還元(その1)

〈新国語研〉

対象(聴衆)別に各種行事を企画・開催

●専門家向け

・新国語研設置記念フォーラム(第１回)
(H21.10.10～10.12：延べ650名)

・International Symposium on Accent and Tone
(ISAT 2010)(H22.12.19～12.20：約130名)

・International Workshop on Geminate Consorants (GemCon2010)
(H23.1.8～1.9：約60名)

・国際学術研究集会：漢字漢語研究の新次元
(H22.7.30：102名)

〈旧国語研〉
隔年で国際シンポジウムを開催

○研究成果の還元（その2）

〈新国語研〉

●専門家向け
・NINJALコロキウム（国内外の優れた研究者による最前線の研究成果の発表）：１６回開催
・共同研究発表会：　１０９回開催

〈日本語教育関係〉
・第２回フォーラム「日本語教育における教育と研究の融合－過去と未来を繋ぐ－」（H22.3.21：約90名）
・シンポジウム「多文化共生社会における日本語教育研究」（H23.1.22：83名）

〈旧国語研〉
・成果普及セミナー（H19.8.20、H21.3.25）
・公開研究発表会（H20.1.26）：「「生活日本語」の学習をめぐって-文化・言語の違いを超えるために-」
・情報資源の活用に関する検討研究会（H20.3.4）「日本語教育データベースの構築の可能性と課題」

○研究成果の還元（その3）

〈新国語研〉

●一般向け

・公開シンポジウム「ウチから見た日本語、ソトから見た日本語」
［機構主催］(H21.12.5：約400名)

・第３回NINJALフォーラム「日本の方言の多様性を守るために」
(H22.12.18：224名)

・第４回NINJALフォーラム「日本語文字・表記の難しさとおもしろさ」
(H23.9.11：約400名)

●児童･生徒向け

・「NINJAL探検プログラム」「NINJAL職業発見プログラム」等を適宜開催

〈検 証〉

研究成果を対象（聴衆）別に還元する仕組みを設けたことは適切

○政策への貢献

〈新国語研〉
政策にも貢献しうる基礎(学術)研究を通して、研究者が主体性を持って省庁に協力し、研究成果を還元

〔例〕委託事業の実施
審議会等への参画
専門的観点からの助言(文化庁等)
等

〈旧国語研〉
政策の企画・立案を担う所轄省庁の施策に沿った業務を実施

〈検 証〉
学術研究活動の一環として、研究成果を政策等にも還元していることは適切

報告書p.13・p.34・p.35

〔具体例〕

〈新国語研〉

●文化庁からの委託研究「危機的な言語・方言の実態調査研究」(H22年度)を実施し報告書を作成

●旧国語研から承継された研究成果は、文化庁「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案」の作成に活用

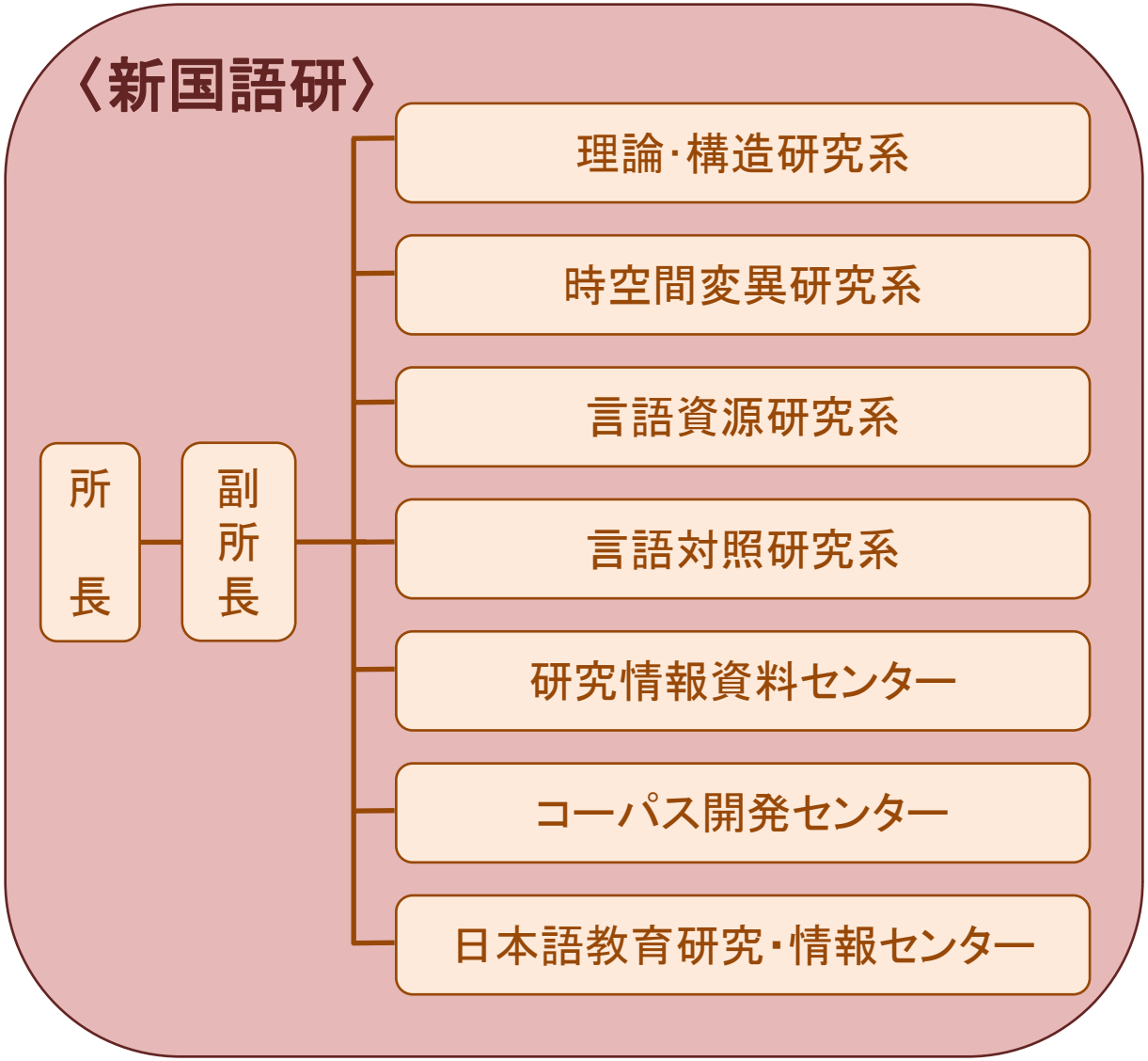
●研究所が行っている最近の研究内容等について、文化庁へ積極的に情報・成果を提供

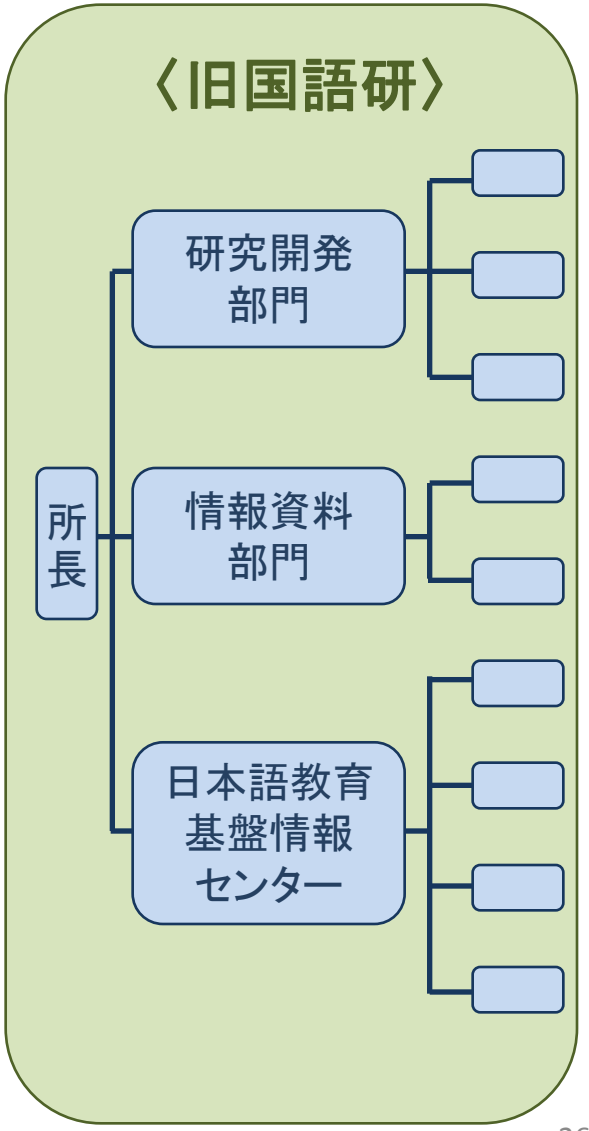
●国語関係、日本語教育関係の審議会等へ専門家として多数参画

報告書p.54・p.55

(6)組織・予算等

〔組織図〕





○ 組 織

〈新国語研〉
- 人事を含む研究教育体制については運営会議で審議
- 世界レベルの研究者を多く登用
- 日本語教育研究・情報センターの研究教育体制を強化
- 博士号取得率増加
- 研究者が研究に専念できる体制（研究推進課を新たに設置）を整備

〈旧国語研〉
２部門(研究開発部門・情報資料部門)、１センター（日本語教育基盤情報センター）及び管理部(総務課・会計課)

〈検 証〉
４研究系、３センター及び管理部(３課)に整備したことは適切

○予算

〈新国語研〉

・H22年度新規予算として「多文化共生社会における日本語教育研究」の共同研究経費を計上
(H22年度決算額：1,176,865千円、内、日本語教育関係経費：58,465千円)

・平成23年度新規に100億語を対象とするコーパス開発費を措置

〈旧国語研〉
H20年度決算額
1,101,849千円
内、
日本語教育関係経費
71,389千円
(当該年度で終了した事業を含む)

〈検 証〉
共同研究プロジェクト経費として平成２２・２３年度連続して新規予算を措置されたことは適切

報告書p.16

Ⅳ.まとめ

新国語研は

大学共同利用機関として

《国際的研究拠点として日本語を世界の諸言語の中に位置づけ》
《他の言語研究や関連する分野との共同研究を推進》する

業務を十分に実施している